令和7年度　学校評価計画書（最終評価と今後の課題）

石川県立金沢伏見高等学校

	重点目標		具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考	最終評価と今後の課題
1	生徒が自己実現に向け、失敗を恐れることなく、様々なことに取り組めるよう教職員は安心、安全な教育環境を整える。	①	基本的生活習慣の確立を図るため、授業開始１分前の予鈴をなくし、定期的にノーチャイムデーを設け、自ら時間を意識した行動をとれるよう指導する。	生徒支援課 各学年	時間を守る意識の高い生徒が増えている一方、時間を守るにあたり、予鈴や教員の呼びかけを頼りにしている生徒もいる。	【成果指標】（生徒） 生徒が時間を意識した行動をとることができる。	（生徒）時間を意識した行動をとることができる生徒の割合が Ａ：９０％以上 Ｂ：８０％以上９０％未満 Ｃ：７０％以上８０％未満 Ｄ：７０％以上	Ｃ、Ｄの場合、指導方法を再検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	生徒アンケートの肯定的評価は９４．９％でＡ評価であった。 ノーチャイムウィークの定期的な実施により、生徒の時間を守ろうとする意識は高まっている。今後は、生徒自ら確実に時間や期限を守る対策を講じられるようになるよう考えさせていきたい。
		②	昨年度実施した「おは活」（朝のあいさつ運動）に加え、生徒会や校風委員を中心とする啓発活動を行い、自発的に挨拶しようとする意識を高められるようにする。	生徒支援課 各学年 各部活動	多くの生徒が校内で挨拶を交わしている。しかし、自ら進んで挨拶することを意識している生徒の割合はまだ目標には届いていない。	【成果指標】（生徒） 生徒が自ら進んで挨拶ができる。	（生徒）自ら進んで挨拶できる生徒の割合が Ａ：９０％以上 Ｂ：８５％以上９０％未満 Ｃ：８０％以上８５％未満 Ｄ：８０％未満	Ｃ、Ｄの場合、改善策を検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	生徒アンケートの肯定的評価は８１．０％でＣ評価であった。 生徒が中心となって取り組む挨拶運動を行い、進んで挨拶できる生徒を増やしたい。さらに、生徒が挨拶の必要性を感じられるような機会を増やしていきたい。
		③	いじめ防止に関する講話や教員対象の研修会などにより、生徒・教員ともにいじめに関する意識を高め、いじめの起こらない雰囲気をつくる。	生徒支援課 保健相談課 各学年	「いじめはどこにでもある」という認識のもと、実態の把握に努め、個々の事案について、組織的かつ迅速に対応している。小さな変化を見逃さず情報共有を行う体制を維持する必要がある。	【努力指標】（教員） いじめを見逃さない学校づくりに組織的に取り組んでいる。	（教員）本校の「いじめ防止基本方針」に基づいて、いじめやネットトラブルの未然防止に学校全体で組織的に取り組んでいると回答する教職員の割合が Ａ：１００％ Ｂ：　９０％以上１００％未満 Ｃ：　８０％以上９０％未満 Ｄ：　８０％未満	Ｃ、Ｄの場合、改善策を検討する。	７月と１２月に学校評価（教員）で調査する。	教員アンケートの肯定的評価は９３．８％でＢ評価であった。 いじめに関する講演会や事例研究を行うことにより、全職員のいじめに対応する力を高め、引き続きいじめの防止、いじめの早期発見、いじめの対処に組織的に取り組んでいきたい。
		④	美化委員、保健委員を中心に学校生活の環境保全に関する啓発活動を自主的におこない、環境保全に対する生徒の意識を高められるようにする。	保健相談課 生徒課 各学年	ゴミの分別については改善傾向にあるが、引き続き掃除の時間に美化委員の生徒がゴミ分別チェックを行う。また、消灯に関しては、誰もいない教室の消灯がなされていないことがあった。	【成果指標】（生徒） ゴミの分別、教室やトイレの消灯が正しくなされている。	（生徒）ゴミの分別、教室やトイレの消灯、校内の環境保全活動に積極的に取り組んでいる生徒の割合が Ａ：９５％以上 Ｂ：９０％以上９５％未満 Ｃ：８０％以上９０％未満 Ｄ：８０％未満	Ｃ、Ｄの場合、改善策を検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	生徒アンケートの肯定的評価は９０．３％でＢ評価となり、前期の８９．０％（Ｃ評価）から向上した。 今年度は新たな取組として全校生徒による校外清掃活動を実施した。今後も保健委員や美化委員を中心とした環境保全に対する意識が高められるような取組を行っていきたい。
2	生徒が学習意欲を高め主体的に学ぶ方法を見つけられるよう、教職員は様々なＩＣＴ機器を活用した評価の研究をすることにより指導方法の改善を進める。	①	各授業において、ＩＣＴ機器を効果的に活用した評価の研究を進めるとともに、評価方法の具体事例を教科間でも共有していく。	教務課 各学年 各教科	研修をとおしてＩＣＴ活用力が上がり、ほとんどの教職員が授業で積極的に活用している。引き続きＩＣＴ機器を活用した効果的な評価方法についての研究と情報の共有を進めていく必要がある。	【努力指標】（教員） 教員は生徒の思考が深まるよう、ＩＣＴ機器を活用した評価の研究を進めている。	（教員）ＩＣＴ機器を効果的に活用した評価の研究を進めることに努めたと回答している教員の割合が Ａ：９０％以上 Ｂ：８０％以上９０％未満 Ｃ：７０％以上８０％未満 Ｄ：７０％未満	Ｃ、Ｄの場合、ＩＣＴ機器の活用方法に関する研修体制を再検討する。	７月と１２月に授業評価（教員）で調査する。	教員アンケートの肯定的評価は７５．１％でＣ評価であった。 ＩＣＴ機器を活用した事例研究が進んだことにより、さらに効果的な活用を目指す意識が高まってきている。業務効率化にもつながるよう引き続き、ＩＣＴの効果的な活用法について研究を進めていきたい。
		②	学習時間調査や面談等を活かして、生徒が自分に必要な学習量や内容を理解した上で、見通しを持ち家庭学習に取り組む態度を育て、学習習慣の定着を図る。	教務課 各学年 各教科	家庭学習状況を担任が把握し、学習内容の偏りや時間不足の生徒に対し、速やかに面談を行い、助言や支援を行っている。生徒が家庭学習の必要性を実感できるような指導の工夫を進め、生徒の主体的な学習習慣の定着に向けた取組を継続する。	【成果指標】（生徒） 生徒が自分で学習目標を設定し、それに向けて学習に取り組むことができる。	（生徒）「自分で立てた学習目標に向けて学習に取り組むことができた」と回答した生徒の割合が Ａ：７０％以上 Ｂ：６０％以上７０％未満 Ｃ：５０％以上６０％未満 Ｄ：５０％未満	学年別に評価し、Ｃ、Ｄの場合、学習指導のあり方を再検討する。	授業評価アンケートに合わせて生徒が回答（年２回）	生徒アンケートの肯定的評価は７２．８％でＡ評価であった。 生徒の多くが、自分の目標に向けて学習に取り組むことができている。今後は、生徒が学習成果や成績結果に着目して、自ら掲げた目標の妥当性を分析し、学力向上や進路実現に向けて主体的に取り組めるようにしていきたい。
3	生徒が充分な情報の中から自分で考え選択し進路決定ができるよう、教職員はキャリア教育の充実に努める。	①	ホーム担任等は面談を丁寧に行い、生徒が将来を見据えて進路目標を設定できるようにする。	進路指導課 各学年	個別の面談を通して生徒との良好な関係を築いているが、生徒一人ひとりの適性や能力をふまえ、適切な目標設定と将来の進路についてより深く考えるための情報を提供する必要がある。	【成果指標】（生徒） 個人面談や進路ガイダンスにより、生徒が進路先を検討・比較する情報が提供できている。	（生徒）担任等との個人面談や進路ガイダンスにより、進路先について自分で比較し選択するための情報を得ることができた生徒の割合が Ａ：９０％以上 Ｂ：８０％以上９０％未満 Ｃ：７０％以上８０％未満 Ｄ：７０％未満	Ｃ、Ｄの場合、面談内容や時期、および面談回数等、生徒への情報提供のあり方や意識づけ方法を再検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	生徒アンケートの肯定的評価は８０．１％でＢ評価であった。 生徒は概ね進路選択に関する情報を得ているが、1年生は他の学年に比べて評価が低かった。1年生から自分の将来について考え、必要な情報を自分で入手し、適切な進路選択ができるよう学年と進路指導課が協力して支援していきたい。
		②	生徒の進路志望決定に向けて、全教職員で取り組む体制を整える。	教務課 進路指導課 各学年	総合的な探究の時間や伏見プラス等、生徒の進路決定に向けた取り組みを行っている。	【成果指標】（生徒） 総合的な探究の時間や伏見プラスの取り組みが、自身の将来の生き方や進路について考えるきっかけになった。	（生徒） 総合的な探究の時間をはじめ、伏見プラス等学校の取り組みが、自分の進路について考えるきっかけとなったとする生徒の割合が Ａ：８０％以上 Ｂ：７０％以上８０％未満 Ｃ：６０％以上７０％未満 Ｄ：６０％未満	Ｃ、Ｄの場合、取組内容や生徒への情報提供のあり方、意識づけ方法を検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	生徒アンケートの肯定的評価は６４．８％でＣ評価であった。 伏見プラスや総合的な探究の時間の取組が自分の進路選択につながっていることを意識できるようにその目的や意図について生徒に考えさせていきたい。
		③	生徒と保護者に対し、進路選択に役立つ説明会を適時適切に実施する。また、進路志望実現のために必要な学習環境を提供する。	進路指導課 各学年	生徒の進路志望を実現させるために、具体的な目標を提示し、生徒が意欲的に努力し続けるサポートをしている。	【成果指標】（生徒３年生） 生徒が第１志望の進路先に合格することができる。	（生徒３年のみ）（年度末進路結果） 志望する上級学校に合格した生徒の割合が Ａ：８０％以上 Ｂ：７０％以上８０％未満 Ｃ：６０％以上７０％未満 Ｄ：６０％未満	Ｃ、Ｄの場合、面談内容や時期、および面談回数等、生徒への情報提供のあり方や意識づけ方法を検討する	進路志望調査と年度末の進路結果で調査する。	現時点では、志望する上級学校に合格した生徒の割合は８６．５％でＡ評価である。生徒の進路希望が達成できるよう、学力面でのサポートに加え、奨学金などの情報提供を行うなど各方面と連携し生徒を支援する。

重点目標		具体的取組		主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考	最終評価と今後の課題
４	教職員は生徒が生徒会活動・部活動・学校内外の行事・体験活動をとおして自己肯定感を高めることができるよう支援する。	①	部活動は人間力の向上につながることをガイダンス等を通して生徒に考えさせるとともに、生徒が自ら部活動の魅力を理解できる機会を設けることにより、加入率を高める。	生徒支援課 各学年 各部活動	「部活動が学校生活を活力あるものにしている」と認識している生徒が多く、生徒は部活動を通して学校生活の充実を図っている。一方で、学年が進むに連れて加入率が下がる傾向があり、３年間継続して活動できるよう、活動内容の工夫や環境づくりに取り組む必要がある。また、短時間で効率的な活動による生徒の満足度の向上を目指している。	【成果指標】（生徒） 部活動に登録した生徒の割合が増加している。	（生徒）部活動に登録した生徒の延べ人数が全生徒の Ａ：８５％以上 Ｂ：８０％以上８５％未満 Ｃ：７５％以上８０％未満 Ｄ：７５％未満	Ｃ、Ｄの場合、各部活動の活動内容・記録等を周知するとともに高校生活を通して部活動を続ける意義を実感させる取組を再検討する。	５月と１０月に部加入率の調査を実施する（３年生は５月のみ）。	今年度の１０月調査では６６．６％でＤ評価であった。 本校生徒にとって、魅力的でやりがいのある部活動とは何かを追求していきたい。本校に限らず生徒の部活動加入率は減少する傾向にあり、達成度判断基準についても今後検討していく必要がある。
						【満足度指標】（生徒） 生徒が、部活動は学校生活を活力あるものにしていると考えている。	（生徒）部活動が学校生活を活力あるものにしていると考えている生徒の割合が Ａ：８０％以上 Ｂ：７５％以上８０％未満 Ｃ：７０％以上７５％未満 Ｄ：７０％未満	Ｃ、Ｄの場合、各部活動の活動時間や内容等を検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	生徒アンケートの肯定的評価は７８．２％でＢ評価であった。 部活動だけでなく、生徒が中心となって企画運営する学校行事を充実させることにより、学校生活をより活力あるものにしていきたい。
		②	ボランティア活動後の振り返りを充実させ、自己の成長を実感させることで、ボランティア活動に積極的に参加する意識を一層高める。	生徒支援課 各学年 各部活動	伏見川清掃や地元町会と雪かきボランティア協定を締結するなど、地域から信頼される学校づくりの一環としてボランティア活動への参加を促している。	【成果指標】（生徒） 生徒が、ボランティア活動は学校生活の充実や自己の成長につながると考えている。	（生徒）ボランティア活動が学校生活の充実や自己の成長につながると回答する生徒が参加生徒の Ａ：８０％以上 Ｂ：７５％以上８０％未満 Ｃ：７０％以上７５％未満 Ｄ：７０％未満	Ｃ、Ｄの場合、活動計画の周知を徹底するとともに、活動の意義を実感させる取組を再検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	生徒アンケートの肯定的評価は９２．７％でＡ評価であり、昨年度の８５．６％を大きく上回った。 自ら進んでボランティア活動に参加する生徒が多い。振り返り等を充実させることにより、生徒の自己有用感、自己肯定感の向上につなげていきたい。
５	教職員が組織的、協働的に業務に取り組むことにより、教育活動全般の効果、効率を高める。	①	効率的、効果的な業務遂行に向け、職員が自身の担当業務だけでなく、課・学年を越えて協力し合うことを心がける。また、行事等の実施時期や内容について全職員に周知する。	副校長 各課・学年主任	多くの職員が依頼があれば協力しあえる職場環境となっている。情報共有を進め、教員一人ひとりが、全体像を把握しアイデアや力を出し合うことで、より効果的な業務改善と教育活動の充実に努める必要がある。	【努力指標】（教員） 教員は効果的な業務遂行に向け、組織的、協働的に取り組むよう努めている。	（教員）組織的、協働的に取り組むよう努めている、概ね努めていると回答する教員の割合が Ａ：８０％以上 Ｂ：７０％以上８０％未満 Ｃ：６０％以上７０％未満 Ｄ：６０％未満	Ｃ、Ｄの場合、次年度の取組を再検討する。	７月と１２月に学校評価（教員）で調査する。	教員アンケートの肯定的評価は７５．０％でＢ評価であった。 風通しがよく、良好な雰囲気の中で業務が進められており、想定外の業務に対しても職員同士が協力して対応できている。今後は、できるだけ計画通りに業務が遂行できるよう、課や学年を超えて協力し合える職場環境の構築に努めていきたい。
６	教職員は、担当する教育活動の成果等について、学校ＨＰや印刷物等を活用して保護者や地域に対し迅速かつわかりやすく発信する。	①	本校ホームページをより閲覧しやすいように工夫し、保護者や地域、中学生とその保護者等への情報提供を一層充実させる。 緊急連絡は、一斉配信メールに加えてホームページでも発信する。	副校長 各課・学年主任	日々の学校生活や行事、部活動などの様子が保護者に分かりやすいよう、学年通信の掲載内容を工夫した。さらに、配信メールで掲載を案内したことや、ホームページ上の写真の掲載方法を工夫したことでアクセス数が伸び、保護者からも高評価を得ている。	【満足度指標】（保護者） 保護者が本校の教育活動全般を理解し、満足している。	（保護者）本校の教育活動についてホームページや配信メール等で提供される情報に「大いに満足している」、「満足している」と回答する保護者の割合が Ａ　９０％以上 Ｂ　８５％以上９０％未満 Ｃ　８０％以上８５％未満 Ｄ　８０％未満	Ｃ、Ｄの場合、提供する情報の内容やタイミング等について再検討する。	４月から７月と、８月から１２月の集計で評価する。	保護者アンケートの肯定的評価が６８．９％でＤ評価であったが、生徒、職員アンケートでは、肯定的評価がそれぞれ８９．１％、９７．９％と高評価であった。 ホームページや配信メールに加え、今年度よりクラッシーを導入し、情報をきめ細かく適時適切に提供している。今後、必要な情報の提供にあたっては、直接配布するお便り等を含め、適切な伝達手段の利用を心がける。

学校関係者評価委員会の評価	・現在の取組は、生徒が主体的に進路や学びを選択する大きな転換期にあり、過渡期として成果と一時的な数値低下が併存するのは自然なことと考える。取組の定着を通して、今後、生徒・保護者の満足度が総合的に高まるよう取組を継続してほしい。 ・部活動の活性化とともに、ボランティア活動などを通じた「やりがい」や「人のために行動する経験」を一層充実させることを検討してほしい。 ・習熟度別指導について、理解の異なる生徒が混ざる混合型の授業の方が、つまずきの共有や多様な解決方法の発見につながり、学びがより深まると考える。混合型による指導の在り方についても検討してほしい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	・評価が下がっているように見える点については、生徒が他者や学校全体を意識し、課題解決に向けて行動しようとしている表れと前向きに捉えている。今後も、生徒の声に教職員が丁寧に耳を傾け、適切に対応する体制を継続的に整え、満足度の向上につなげていく。 ・部活動の活性化を図るとともに、ボランティア活動などの「人のために行動する経験」を通して、生徒がやりがいや自己有用感を感じられるよう、活動内容の一層の充実に努めていく。 ・混合型の授業で重視されるグループワークや教え合いなどの協働的な学びについては、本校でも実践している。今後は、こうした取組に加え、生徒の学習が個別最適となるよう、ＩＣＴやＡＩを学習支援ツールとして活用していく。